朝夷巡嶋記

第二編　巻五

イ13
939
~~35~~10

イ13
939
35

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之五

東都　曲亭主人編輯

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

初輯第十九

野干玉の罩燭
藕弥深の袖巾

八嶋室平師住八義秀よ投折うれてゑゞ刀を起とかゝつ孤。おほ兵卒八
夥あるも。さゝとゝもこゝ。ゑゞ志を激して匍匐ゑゞ天地を敲。ゑゞ入ゑゞ與
者共うゝ。などて虚記ゝ熟視てゑゞ縱朝夷ゑゞしゝとて鬼神ゑゞよもあゝ。
ゑゞ礼ゑゞも怪光て歩行不自由ゑゞゝ。軍配八ゑゞ裏よゑゞ。掛ゑゞ
ゑゞし。ゑゞと敦圍ゑゞ。夥ゑゞ有理と云ゑゞて。ゑゞ勢を憑む群雀。黍の川穂ゑゞ
著ごゝく。咄こ嘯て。ゑゞ蒐れゑゞ。ゑゞゝゝゝと義秀ゑゞ薮ゑゞ添ゑゞ。ゑゞの立ゑゞ。
根扱ゑゞ丁ゑゞ。ゑゞ技ゑゞ。ゑゞ搞ゑゞ矢せゑゞ難倒。縱横ゑゞ礙ゑゞ拉げゑゞ廣光ゑゞ亦ゑゞ

うち振り。追立追詰攻戦入いとる烈し。死大刀風勇力。當るべうもあらざれべ。四五十人の雑兵ハ半ハ矢庭に命を隕し半ハ地上に打居られて覚まあいして拜むのみ平張伏て長吠せり。義秀呵々と冷笑ひて。彼大木を礫と投棄て生よ。勸解おバ晋ゑさのみハ益の殺生あるんさられあの室平奴ハ。ゑーゲと死癖者と去ること来よと跳懸て。宙よりう提て廣光がほとり近く撲地と推居汝ハ曩よト絡庵ゆく。飽まぞこれを挽せーゲ。いふまゲ本事をちうやあかよ汝ハ民を虐げ。私欲に耽るものをバそ。安頼の時夏と捐貢てをきく須主の聽ず。暗まし。逆徒五頭平ゲ泛言を幸ふして温順の君子さう義邦を搦捕んとそ。乞基麼なる道理ぞやそれ幾遍欲時夏を。凋殺さんとすひーゲども義邦の面よ覿ゑ。故ーお死るを知らざるや。今亦汝を殺をとも鼠を猫よ見る。雖然汝ゲとき八則民の蠹毒と低弱不具のもとをさ泛ハ虎を深山に走

似ゑる。且く苦痛を忍べーと。罵懲して腕を捺れて腰骨を蹂躙ハバ。室平ハひと泣く声霜夜の虫あり。細ゑうけ。義秀ハさあらをと。項上凋てう起し。汝めー先非をあくバ。吉見冠者に罪おきすを左典厩へ義兼をりゑ吟えあげよ。時夏ゲト絡に與し。密書あるよあり。汝めー先非をあくバ。ゲゑるに訴く時夏ゲ隠慝を顕せ然ぞハゑれ又之を来て汝ゲ首をう撥棄ん項骨ふよく覚よと。再三び呵嘖て。藪の中へ礫と投入る。又難兵ホを搖凋て魚竹叢へ投入るよ。ゑ毬おどを弄ぶく。死るものさ迷をとおし師侍ゲ徒を藪の中へ隠れ。再度の追兵いで来ること遅ん。その隙に廣光を扶く封彊を出ぞやとそ後くまでを謀るあるべし。當下廣光ハ恭しく義秀に再生の恩を拜謝。躯て宿所に使ひつ。義邦ハ并平共侶加北を投て脱去る。繹の趾を告んとするに義秀これを吟あへぞいおそのゑハ故ありてこれを昨夜吟ゑ。これを告ぞ知ハあれど。

燕居安坐のと紀あ〜ねばとく禍を避るそ。肝要あ〜め。血よ染くる衣をつ。充飽まで食〜て走るぬ〜といつよ廣光あろ始て酒食をとう出て。義秀と共よたらぐ〜。割籠さ〜准備〜つ遽〜く衣を脱更姿を窶〜。笠をふかく〜。両人斉一宿所を出るバ義秀ハ先よ立て。大石山めぞとけ入りぬ。あと紀蕃光袂を掖て某ハ妻と子どもを赤貝まで牢〜お紀こういふせまと不樂〜らよ密語。うち微笑こいおそのすハ心安うし某昨夕ぬぜよ。赤貝の郷ホ〜て浅良井ぶ。對面せう。それハ上野のくより来つ。婦人ハ人よ偽て。その家よ入らんとせ〜と紀。灯光よ面をあ〜つ。迭よ吸けぬとあ〜れ。躰てその奥よ聚會て五頭平うす。時夏ぶ奸計冠者ハ井平ぶ資よ〜て。共よ北国を投て脱去らんとせ〜らしい〜う。浅良井どのよこれを聴特よ彼〜ら太郎とゆ〜んいと精悍〜紀めのしゐつれ〜ぶ肺肝を説示〜て。おづそ親苗四郎ホ〜ら亡骸を葬せ迦婦人稱児〜ら太郎を。

傳げてその夜の中よ越の中州婦負岩神の里正ぶ稲向判五許遣〜うこの稲向ハ。の某と舊縁あ〜曩ホ某加賀の小松〜逃くお簡様さこのあ〜て不曉もその女兒友鶴ぶ危窟を救ひて。恩人一三といつめまき環會媒妁せ〜し〜ねく辭まろこよ〜なく友鶴と娶そて。岩神ホ歩を駐めてその春を迎〜ぬ紀よ〜て某消息と和慶の内室子息のうへを判五友鶴ぶよ憑遣〜〜ろ〜ぬ〜心安くぶ〜ぬ〜只心ぬ〜ぶ紀公言見ぬ〜の往方〜佐味笠内高利ハ鶴倉殿頼ぶ召使〜て今ハ加賀よハもぶ〜なりぬ。と名〜ぶ〜て遥〜と北国〜赴紀ぶ進退ぶ便ぶ〜んぶ〜ぶ加内室をその夜れ中よ起行せ途ぶ〜てあ〜ぶ冠者と井平よ曲を告て。ぶ〜ぶ岩神ぶ。稲向許赴けとて〜ぶ太郎ホ意ぶさせて遽〜く出ぶ和慶のうもぶ〜ぶ心ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶバ。某ハ暁ぶけて歩ぶ〜ぶて来ぶ程よ果〜て謀る所よ違ぶ和慶ハ行ぶの大勢ぶ〜ぶ巻〜れ既よ危ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶバ暁よ〜ぶて捷徑を驀直よ走り近ぶ紀室平ぶを拉紀て。

輙く救ひ給ひぬ。不思議の再会素懐に稱ひぬと歓しくいへと縡詳に説示せば。廣光いよく感謝に堪ず。原来浅良井小三二郎ハ遨遊路へ赴給ひし後も亦是和君が恩澤にぞあるべき。冠者ハ豈思ひきや加北へ赴給へバなん和君の上を日夜くこの地に到着ぬるまで今この悔ハあるまじきまゝとつひうち歎く頷を拊只管嗟嘆したりしかバ義秀も亦嘆息し天命必盈虚あり。離合に時あり人よくせんや。縁竭ざれバ邂逅に亦復冠者と環會なんされも豫ての約束を違へじと云ひしかバ再遊の儀を要時も忘れねその期に後るゝよあらねど亡父と先師の年忌に丁ればまづ下総に赴て間中の野寺に参詣しそこの地へ帰つゝ。和殿主従周より罪ありと今ハ兎も角も命を全して良き時を俟ん和ハともかくもまづ蹤を暗まし脱去るよまれり。街道より進んでハいと危き所なれバ一両日ハ山路を蹤踵て岐岨路に出なバ宜るべし。さのミな案じ給ひそ。

傳けてその夜の中に越の中州婦負岩神の里正なる稲向判五許遣しうこの稲向に只その某と舊縁あり。曩に某加賀の小松へ趍く折。箇様くのよしありて不慮もその女児友鶴が危窮を救ひて恩人一三とりあへず環會媒妁せしむべく辞まうたしなく友鶴を娶もて岩神に歩を駐てこの春を迎へ一児ありく某消息し和睦の内室子息のうへを判五友鶴にも憑遣しうちまれバ心安く思ひねへ只心あるとが汝吉見ぬーの往方之佐味笠内高利ハ鎌倉殿家頼に召使れて今ハ加賀にハあらぞなりぬ。と思ぞして還こと北国へ赴給ひぬへ進退充使ありんなる故に内室をその夜汝中に起術世途はしておもをあらバ冠者と井平に由を告てある共に岩神なる稲向許赴けとて太郎にも意ぬさせて遽しく出せしが和殿のうへきなれども心もとなく思ひしかバ。某ハ暁るけて歩のそびして来る程に果して課る所に違ハぞ和殿ハ討手の大勢にとり巻れ既に危くみえしかバ喚よぞりて捷径を蓦直に走り近つき室平木を拂ひて

輙く救ひ給ふ。不思議の再会素懐を遂ひぬと欣しくいへと詳細に説示せば。廣光いよく感謝に堪ず原来浅井小三郎は越路へ赴ひ紅赤是和君の恩澤なりとも冠者ハ為てもの。加北へ赴ぬハなん和君の上日もなく。この地に到着をぬ。今この悔ハあるまじきよとつひろけく額を拊ち嗟嘆したりしハ義秀も亦嘆息し天命必盈虛あり。離合の時あり人よくせんや。縁竭ハ邂逅に赤後冠者と環會なんもの。約束を違へじと。そはしらバ再遊の後を要時も忘れじ。その期に後れるあら孤ど亡父と先師の年忌に丁巳バまづ下総に赴て間中の野寺に来詣しそこの地へ来つる。和殿主後固より罪なし。さもとそ今ハひと紀ぐこんあるに余を全て見時を俟んおもひもかくよる跡を暗まし脱去るよまひりのみ。街道より進んすハいとも危き所為なれバ一両日ハ山路を躍踊て岐岨路に出るバもとべし。さのみ紀ぬ。

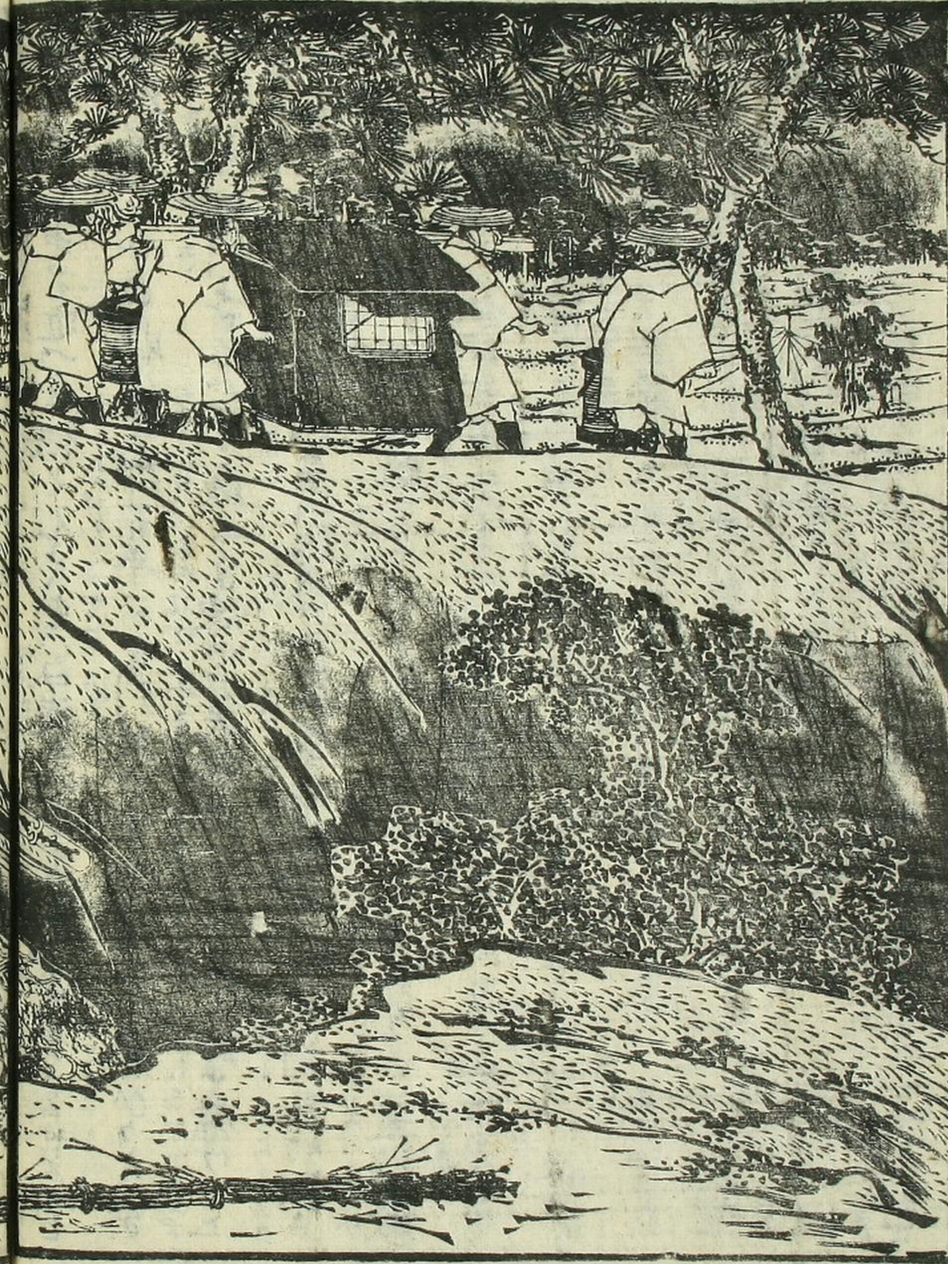
と慰められく廣光ハ一後に及ばぬ感服して後ありし。又先に立つ。樵夫のかよぬ山又山をもかつなくも過てその次の日に下野尻の巣に来しバ。ものそ岐岨路に赴ぬ詰分両頭さてもカ野時夏ハその曠旨に井平を忘野のるに遣せ。ふ夜ハ早二更に近つけども彼ものを求ぬ。ひしバ。ちく心に疑ひつ生才学あるに小厮を召びて。義邦の居所のやを竊に問て来よとそ遣せ。且て走りかへりて。ひとく遅し。と焦燥て異なりしハ冠者に。今宵轉宅せるやん奴婢仍潛やうに雑具を牢いとりやを時夏ぬ。なんん義邦を走して八百計千慮もその往方。つまぐ遠く去べしバ。そ。目代に告領主に許追捕の士卒をそ催さバ。時移りて及びぐこんその方定なく。弦ども。夜をあて去く客あれバ。山路の陰岨に憚て。奥街道へハ赴くべしバ。挾野に勝澤田中を投て。鎌倉道を追蒐ぬバ。一百ばの程中を

とあるを、久むくゝ井平は心をぢらして一大事を思ひ煩ひ、紀く彼奴八生拘てく八創ホして、潰せバ熱くる腸を冷さと紀ゝ。馬は鞍おき松明の准備をせばやと焦燥く。野袴の稜袴を引提く外面へ出れバ駑く牽よ馬ゝ。馬は内ゝとうち乗せバ、美堂郎隷五六人ゝ。れ後ゝ。と馬は引添ひ喘こを後ひる。時夏八鞭を揚く一騎馳は進みて、挾野の船橋を渡りて足掻を駐めくれゝ。従僕一人も来さるゝの川より、あゝ八五頭平ゞ隊下の野客ホ駭ゝ。河原は烽火を立るとき八忽地は集合とゝん。豫て定つることあれバ彼ホを漁りて援はせバやと既は准備をゝ紀ゝバ馬よりをりてこの河原はまづ狼煙をぞ立てりける。こゝとよりて彼此は散在ゝる野客ども五人三人走る程は暫時は三十餘人を拾ふ。時夏竊は欺びて野客ホようち對ひ人く多るこの中は八れを認まるものあるべ。ゝ八力野太郎と同郷の浮浪人吉見冠者美邦も早蠅ゝ味のれゝ下郎井平は漁られて心変もして名は渠八舊悪あるゝれバ領主は告ると叶八ぞ鎌倉へ直訴せんとて今宵井平共侶は上野のゝへ走ゝ。件の風声ゝも吟えて五頭平八忘野ゝ名も紀土民は生拘ゝ。既は獄舎は繋れゝ。れ尉憤は泡堪ぞと美邦ホを撃苗んとゝまでハ追来れゝ。如法夜ホして後僕続ゝ汝達はゝれを資て彼両人を追撃ゝ紀八早蠅ゝ為は怨を復さん各位同意せゝゝ。と賺せバ衆皆大紀は驚紀頭領捌捕ゝて八吾們とその既は危し切ゝの吉見とゝん井平とゝは白徒を撃殺して退散せんと一人ゝいへバ食点頭ゝ。ひあハゝるとゝそゝまゝこのゝゝき夜は続松もゝさで。と賺ゝ行客二人中山道を投てゝくゝ。ゝ八今のとゝゝき彼美邦

ホヨあゝざるをとゝを時夏吟あへぜ。ごとをありく疑べゝべく追留よ。
と奬して再び馬ようち乗る打。時夏う従僕ホハ橋をさして走ル。
さゝバ進めと野客ども周より熟路のるあるバ所得兵器を引提て馬より
先よ逸足半して飛鳥の如く追蒐こう。さる程よ美邦ハ井平共侶通宵。
急ぐとまれど野千玉の烏夜ーあるバをのつゝ歩の運も果敢ぬ。廣光
ホゞるを今さゝに心よゝれいく遍う後方をえ久を立留り俟とハ夜よ小夜
深く焼ちくあう比よ消下野の封彊をえ入れく挾野の津のあをこ勝澤の
松原よ且く憩ー折とそあまを人影散動知て美邦を迎をとゝ声遥よあて
ゝをバ両人齊一立あゞを追捕の兵卒近つ知ぬ。あをて防戦ぜハ四く先
とそも脱をゞゝえさいとそ左右よ立ゝうれ。ゝうゝる松を木盾よゝうて刀の
鞘釘唾湿ー瑳ゆゞてまう程よ真先よ進こあう。一下隊の野客十餘人単燭

如ゝそゝして走を近つき佶とえくをハ白徒ホハあゝをゝうるとゝうよせよゆと
間知て。猛ゝんとまれバ美邦井平双ちを引抜きをこを逆へく。競ひくるを
礙と砍り誑引よせて八丁と砍るを煉の刀光電光石火と晃ー焼靡げ一上
一下秘術を盡して瞬間よ五六人或ハ大袈裟車斬真額梨割乾竹創よ
身首処を異ゝて仆を死骸累ゝゝう。残るるのハこの勢ひよ舌を巻て薫戦
あく。蹈足さへよ定らぬ。道のゆゝ凡凍解よ単皮脱あへぬるの如横死去て
逃亡ゝう。誘この隙ゆと井平ハ美邦をいそゞして。みを鞋よ納しバ再び
吟男人馬の足音程遠ゝゝを裏知ゝう。井平騒ぐ氣色なく。某あゝよ
蹈留をて殺散ーゆひゝん冠者ゝとゝゝく延させゆへと只曾よ練れどの美邦
一歩も退ゝ沒。追兵ハ殊更大勢なんよ。何ぞよ和殿を捨死ーて。何国へゝ逃
隠るべき。只共侶よ死ぞゆと進むを急よ推とゝ。賈誼ゞ策ゆ鼠を敵よ器を

烏鵲
川原よ
巴の尼暗ち
井平を
救ふ
ほさ平



忌むと、いへど真の追兵なるべきを命を限りとして禦ぎ戍ふ。這禦ハ烏合の野客なれ共。
兵をよそ備へ、おのゝ隊伍つゝ整ハぞ。数十人いでまるとも殺散さんといと易し。
頃よ途より時夏よ駈催されあるべ。さうとて由断をべからず。案内知るものゝ
あるに二隊まうられて後より挟まれて攻殺らば防禦わとり難き事よ及ん和君ハあを
退れて鷹崎川をうち渉り二の目を戍つて俟へと誘るれ。もあを西よ當りて
蕉火の光隠ることなくなれバ美邦遥よりえ之よそ原来後陣よ亦敵あり。いて
軽とうんと緩びる三尺帯を揺締て。西を投てぞ退きぬ。結処よ時夏ハ後僕
野客二十餘人ばかり蕉火照させて。蕉直よ追蒐来つ。鳥夜よ立在む井平を先と
推とり巻せて彼生拘ると喚ばバ早雄の野客六七人。倉ばる蕉火投ゆて面もうぞ
嘯て蒐ればバ井平ハ秒高紀松の蔭よ隠れつ頭れつ千変萬化るを畫。
いる烈し紀大刀風よ一隊の野客欲立らるとて殘員を棄て退けバ又野ら後僕入ら。

後陣の野客ども共よ又引包で殺んとるバ。井平ハ美邦を延さんとのこゝろひ。
整ひ立ちく撓ぎして。五六人を砍れ。頻よ進で戰ふ程よ野客ホハ拉ひ。只
火攻よせ。やて。ども道芝よ火を放て風上ようぞ攻る。天さへ陰る曉ゝよ東南の
風吹發ると。その火走りて井平ら前後左右よ煽ぎ。幾三面六臂あり。も脱れ
ぐ。くるとそ。ろ打。颯と吹おろ。風のまゝ。猛雨頻よ降そ紀て疾と盆を傾を
如く忽地よ火をもち滅て。黑白なるそ。井平不思議よ便を覚。
多勢が中へ割て入り。衝と掛投て息も沼吻ぞ武藏のくゝぞ走りるれ。その途を
ちぐ。ハ獻又蹤を跟て来るの。美邦と間を隔て。後やをく延さん沼。時夏ハ今
さらよ井平を整漏て。馬上よ身を肉ゝ澄を聢立て。何延まぞのと追蒐ゝ。雨ハ
まもく降る程よ道のゆゝまよ蹄泥をて馬上ゆゝ疲れうこハ朽ぞ。焦燥て指りつ
鞭つ遣んとるよ。疲れ馬の癖あれバ松の株よ跌紀て横ぎ。よ仆まれ。ハ

斃れて起あがるを。躬ハ只泥に塗れつゝ。當下従者に走り来つ。声をかくべきに辛じて。仆れし馬を牽起し。主を勦りなどする程に。田中の家に鶏鳴て彼雑時になりければ。かくて程に野客ホハ天の明なんとするを見て。影護かひなく褒員を肩に引かけて。東のかたへ影をかくしつ。再ひあしに集合ふが。時夏ハ今さらにせんすべもなきものから。身は戀々とする従者を携へ。邪を漏さじとも。井平ハ東へ走れり。主ハ追奴をしも聲笛を八世の胡慮になさんのことしや。雲時ハ後るとも烏鵲川のほとりにて。追着んと疑ひなし。者共続けといふちもなく歩より進めバ。従僕ホハ馬を牽出て追ふ程に。雨歇て雲ハきさゆりて白く。先きざるさまをさる程に。井平ハ東を投て走りて。烏鵲川まで来まさしバ。天ハほのぐと明白く。随に霽て既に霽れども。航人がやむことなくてや。船ハ前面の岸にありけり。追兵逼らバいかにせましと思ふに心安からず。されバ水際に五六人。輪子を舁ちらして。船のよるをまつものありつゝと見入るゝに。

轎子の内なるハ五十あまりの尼なりけるが。容去ものとおぼしくて。そゞろ泥にまみれつゝ。ねる五六人ハ従僕之焼さしる蕉火を砂の上に投棄て。蹴揚の泥を洗ひなどしつ。船いと遅しと呟くめり。井平ハ又これを見て。嚮に勝沢の松原より西に丁て見えつる火ハこの蕉火なるべし。さて彼徒まちうる人を憑むとおもひバ。遠しく轎子なれ。ほとりへ近つき跪て。件の尼にうち対ひ。忍辱慈善を宗としめす聖と見奉るなれバ。御蔭に立よりまゐらす。賤の追兵を殺脱て。稍ちかくまで来つれども。前面へ渉るべくも船なく。後には追兵のつゞて来るなり。先に舟人の資なし。進退究りて候ぬ。ねがはくは法衣の袖に匿して救せ給へと。うちの嘆けば。尼も亦つらくと見て。やゝ点頭。十悪の罪人なりとも。既に懺悔の心あらバ。仏の慈悲に漏ることなし。況て今なる所極悪の人ならバあらじ。縁故ハしらねども。いまくにあるも得なり。然とて野渡の舟なきバ。身の隠も所もなし。この轎子の内に潜びて前面へ

そこしぬひ孫といと憑しくうけ引つゝ主従ハ躲て轎子を出て床几に尻をかけ。
従僕にあらぬさして濡まてる侭に卉平を轎子に推隠しつ浩処に時宗ハ。
従者共侶に泥に塗れつゝ喘々追蒐来つ水際に立て彼此を再三ぞ見かへるに。
舩人ハいまだ出ず正しくあへ来つる仁翅なくハかゝもして前面へ去れはやあらん。
あな不審と呟つゝ轎子に目をつけて立よらんとする程に尼の従僕推禁め。
こハ狼藉なり鳴平なりといはせもあへず冷笑ひ大罪人を舎蔵ハ出家なり
とも料ハ脱まじ吾儕を指て狼藉とハ鳴呼をこ汝すぞ狼藉めに荷擔する。
鳴平の癖者なるべけれ其が疑ひハなくにあり其処退ぞや罵ひ猛く撥除て
あらんと従その時尼ハ床几をはなちつゝ遽しく轎子の戸口に立て遮り留めこハ
あらぬ壮士が家にして門戸あり途にして轎子も亦是一家に異
ならず出家とあひ侮りて故縁故を告ずして手をうけなバ狼藉なら
ずや鳴平なる所行にあらずやといはれて時宗ハ遽立ちさりしくな
ほざいふり然ども名告て吾せん執権時政の八郷縁者の定利ぬ扶持
せらるゝ刀野時宗とハ吾が事七命不義の家僕卉平がとりも入逃来つたに
その影ども見せざるハ舎蔵てものならんと思ふてぞ轎子の戸を引
ちらちて示せよ然らざれバ其が疑ひを釋かしかつかん速く退り後悔せん。
いはせずやと敦圍ハ尼ハ只その顔を熟視つゝうち笑ひ時政縁の縁者とも義兼
殿の親族なりとも武断に拘らぞ其が寺法に任せよと鎌倉の古将軍頼朝
御教書を賜りし伊豆國藍玉の女僧寺ハ三位頼政卿の後室がをさめたまへ。
菖蒲の老尼住持なり吾儕ハ尼公の弟子なれ名もあきこめの侍まじ信濃國
川中島なる善光寺へ代参をうけたまはり賽の路次なれ寺法を枉べきや。
凡當寺に入るものハ不義七命の男女とも助けらるゝが定法なれバ天子もこれを

咎なからんハぞ。又将軍も辞ひ給ハじ。執権國司ハいハずさら也和殿などゞ及んや。舎爲
こうた刻の如く固より吾儕ハ知らぬことゝ刻断りても異議あらバ鎌倉殿頼家へ此の
あげて是非の裁許に任すべし又さらバ尼公へ披露して住持の随意とるも訐ん欲逐参
よりて許しらバヒいかゞやと問ふされたく時貞ハ眼を睜それハとむらむハ隠て握ぜ
拳のもべなくバ臂を放べく去ハ也ま逡巡して頭を掻ぬよりなき疑心今さらに。
まれく辞を失ひぬ私の怨なれバ官裁ハ願ひなくバ不礼ハ許したへらしとハいへまく
轎子の。こなたを処せて去らバ死人よまぐ疑ひハ釋とやと窘められて舌を鳴らし。
命よ冥加ある奴や銭らバなくて別さん衆皆喜のとほく笑る從者を疾視つゝ、
がしつ舊来れし人もかしもあき航人ハ舩をあきへさしよせて。當下尼を
轎子ぐそのまゝ船よ扛入させ主従齊一うち乗て去ぐるよ前面へさしてく中嶋村の方ぞう
まで又具く憩ひしらバ。井平ハ遽しく轎子より立出て尼ふ對ひて叮嚀よ再生の

恩を拜謝し。其実ハ岐岨路のかたへ赴くものでひへども伴侶なる壮佼を延さんとぞ逆
引ちがへて去なさへ来れり彼のうへ心のとれし身の暇をなつれしとハひ果て立んと
まちを尼ハ急よ推禁め同憂を相憐む信ハ。さあるべきすおれども刀野とやらんなる人を
跟て。かの寃ん も謀ことし固より吾儕ハ使者なるよ既よ和殿を舎義なかるべく
尼公へ申上げまして放遣りて又さらに追兵の為よ内且なバ恐よ死越度いひ免
がさしとやもかく寺まで伴ひ立もとよ文ろへさしども尼公の意ろよまかすべし。伊豆
のハ坊料稿せども菖蒲の尼ハいとやさうき年よりせあひしらバ姪孫駿河前司廣綱
朝臣心もとなく思食て宿所のほとりよ草庵を修理せ祖母の尼公を鑑玉より迎
とりせあひつ今ハ其処なぞをりまい廣綱朝臣ハ源氏の嫡流仲綱朝臣の孫子也。
頼政卿よハ曽孫あり犯鎌倉創業のその頃より頼朝卿よ從ひあひて在一族の上臈
なれども世間を形なくせたるをりまして建久元年十二月判官爵を棄妻子をせ

携武蔵國埼玉郡大田の荘に退隠して遂に又仕をせず残の年月を送りゐたりとぞ。
吾俤八武義ありて大田の荘へ久しく其処まで伴ひ行んとふ井平八辭の趣いと難義
ゆへ是へ一旦危窮を救れる辭せずして去るべうもあらず。彩とハあらで義邦の何
とぞ思ひあり人廣光に諾ひ言葉の虞ハ乾ゐぬ。ふれのこむとう武義野の
うけうぶ花の陰に立バよ。ふ逃水といれれん心ゆき限りといふ世まと困し果て。
さて已べきよあらぬれ。そう俤に後尾に後ひて武義ゆ起ひ。かくことの夜八熊谷の東南
ありて田の八町村に宿りつ。後僕臥薄に尾八井平を召近つけて。まづその
本貫姓名をとづ。又逐電せし縁故。又その友のうへさへに問しうバ井平八
ありくに匿してハあーうなと思ひ。ふれバ勝を進めて首より尾りまでものがうへを
説あらし。又美邦のすを告美秀ぶうへさへ夜とせに拘ぐこれば尾八ぶく嘆息！。
誠に和殿八痛し。北薄命の人ゆゑ加以そ。友ゐる壮士達も大ゐるとあ。ふ桜屋に

身を匿うて。いくその患苦をたゆ。想像るぶ哀れに侍り。就くその美秀
とうの人八安房大瀬の浪人ゆて朝夷と名告ると欲すしその人の乳名を阿三郎
とハいふるゆと問べ井平答ていそをいうやて。養父八浅江の
豊六とゆ。ん乳名八阿三郎とぶくるすのゆひ。といふて尾八目を去バ。
原来八不思議の縁ゑ。吾俤八則彼人の乳母業をとい。ゆ。乳母君に
譯を冒して巴の尾と名告れバ井平ぞ。ぶも小勝を拍て驚嘆。これ
あるとハ。ひとむうゆ欲び。紅色に顕もて感涙堅に禁めぶ朝夷ぬの拘ゐて。
男子ゆもまきゐせゆ心操八豫てぞ。ぬ去歳のその月別れ時まで彼人八只
母君前の狂方いうゆと悲像ぞいひ出ぬ日八ゐうゆ。乳母のその垂乳母に。ひうみ。
危難を救れ。伴をのが弟を朝夷ぬ。よせまほ。れ。ゐバ送ゆ。
再会。その欲びハ。ゐよ。て。殊更ぞ。ゐ。ぬ。ゆ。有為薄変遠感ぞ

おしなべて紀某とそも幼少より孤なりしかへバ友垣結びしその日より朝夷奴と兄の如く弟の如くやよのこと今又あるよ尼御前を母とぞ敬ひまつる子と爲しかへ。と
いへバ頭をうち掉ていなくそれハ僻ずあん棄恩入無為報恩者と佛ハ説ぜゆゑ
なり。法の首途せし日より浮世のすハ忘れ給ふ件の和子ハ母と云ハ
物体かし。生涯面を對ぜるも恙なくハ幸ひあん忘れて年を歴しめ。こそ
人の言ひ繁よ絆さしまつり煩悩の火坑よ入らばいらあせん彼人も又如此あり。吾倚ぐ
絆となるとそ紀ハその志氣遂よ弛そ名をうとハうとく侍ん縛のあとをくもんぜ。
朝夷奴よ再会のとそ紀ありとそも尼がうへを告ぬぐ恨とあん抑吾倚ハ三年来
関の八州を徧歴し今茲正月の上浣菖蒲の尼公よ値偶し侍りて藍玉院よ
杖をそめ此度信濃の善光寺へ代参よ立ちすハ件の尼公の本願ゆ頼政卿
仲綱朝臣大約兎道ゆ討死せし人々の菩提のゆよ彼灵場へ三十三度参詣

せんと誓ひ侍ゆ治承のはじめより参詣三十二度よ及べる今ハ
なしども九十餘歳よなりせ申へバ此人起居も不自由ゆ結願の義を遂ら
このゆをのをいとくう歎せ申が痛しさ代参をやとせ尼公の此人袈裟法衣を
ぬぐ。後僕へよ殺ゆて晴ゆる旅を者侍。あゆ勤果侍ハ吾倚ハ又四国九州
彼此とかく回國の初念を遂んとやよう。かしハ此身とあいふ。ゆ程ゆ侍ゆ。
然るを母とやハ子とやへとそ愛しく歎待れてハ郤。歎の森ゆ下ゆ赤袖濡を
媒ゆん只因もかく縁もなき尼法師と見くれんを送よ後ゆ。ゆ尼ハ
叮嚀よ説示しゆ健氣さよ并平まゆく感激して坐よ慚愧堪ざるのを又慰んゆ
かく畏りそこ退ぬされバその次の日より并平ハと真成よ巴の尼を巣りゆくハ用ひ
ざるとかく一宿ゆ大田の荘ゆ藍玉院よ来ゆれバ巴の尼ハ院主の尼公へ恙なく
善光寺へ詣ゆるようを申えあげ。又并平が縛の越ちもかく告ゆせバ尼公ハ殊ぬ

隣で召よせて見ぬ事よ面白く眉秀で瘢が玉と見るまでよ傳平ある美男なり。
辨舌水の流るごとく才器をのづから顕れて憑ー氣ある壯佼なれバ尼公ハいよく
愛こせ給ひて且客房ハ退せ巴の尼を労ひて休足の暇をあらう。別人をもて并平を
管待させ給ひ。さる程にその夜さう。廣綱朝臣ハ例のごとく尼公の安否を訪ん
とて。藍玉院ハ詣来給ひつ。當下尼公并平ハ窪の趣を告給ひてその才貌を
稱へバ廣綱聞てうち微笑こ寔ハ宜ふごとくあらバ能あるものよいん試給ふ
一見をべーそのあれ召せ給へりと。他支もなく応給へバ尼公ハいよく歓びて臂ちかこ
使ふ介添の老女を見えなくて云云とぞ宣給へ。かくて又媼子并平ハ巴の尼ハ案内
せ〜しく。廣綱朝臣ハ見給ふ廣綱遥ハこれを見て。媼子并平と八汝ハ薄命ハ
才子なるハ尼公の見物語ハ聞つ。されも亦時ハ遇ぎ年来村落ハ退隠せ
あれバ辭歓絶てなし。鎌倉中もをしと欲浮世のるも学まじ。武藝文学

さそあらん長途の疲労ハ忘ぎ尼公も徒然ハをハ一ませバ夜とともハ譚を
明さん。秀ハ〜と召よせて四表八表物語ハまつその言辨応答を詰り
試こ武備文事何れとく一ツ二ツ問ふ〜并平ハ辞譲ーてみるもの〜ぞとのこ
いひもど。侮りぞ紀と多ふるもその才測るべうもあ〜孤バ忘ぞも嘆賞ー世ハ
ふる奇才あ〜れ大國を領ーあバ并をもちて佐とせん。數頃の田園ハ花を
養ハ今ハしてハせんまぞかーもうハあれどもいかーへの賢人の迹をふるハ孟子ハ
徧小の藤國ハ遊び武侯ハ西叟の蜀漢を佐ふ。和殿ハ村落の一隠士を
厭ぎハ且くハ留まり。とやもくも扶持をべーいふうけべうるを。と問ひて
并平額をつき。御寔ハ身ハあまりて有ぞ紀まで泰ーさうあ〜。江廣光ハ
諾ひ〜ろ吉見殿の安危定ふなーぞ件の力称ハ辞せバーてあハ侍バ卻心
苦ーぞ紀ぎハあん且く身の暇をあらう。加賀の小松ハ赴紀て美邦の安危を

ゝ。時宜よありて又さらに見参よ入れんとゝ。蒙らバ。ナよおきものゝ章と。
ゝ入て請しらバ廣綱ハその信あり。義あるを稱て再び留めゞ。ちらんゝ力恐ゞ
よりゆ加北へ赴くとも義邦あゝゞ彼延よあり。今さゝ定めゞこゝろゝ。
彼人まあよりゝ。ゝ直よまゝさへゝ事よ他よ身を寓あゞ悲こゝ。とゝおくても
後れるよ。一両日ハ休足して。ゆゝゝ發足せよゝ。むゞも送懸の趣舎心中
亮察あゝゞ。といと叮嚀よゝえさせゝ。衣裳一襲を贐。菖蒲の老尼も
共倍よ名残を惜せゝゞ。既よ暇をゝりなゞゝ。十日ゝ安居せゞ紀ゝゝ。
加北へ赴紀ゝ。吉見冠者の安危をゝゞ。又當院よ参上て御暇ゝ。
かゝハ明暁發足と思ひ決てゝ。潔く答ヘせバ。廣綱ハその意よ任て更よ留別の
盃をとゝせゝ。又拘ゝゝゝなゝて。鶏鳴暁を報る程よ井平ハ恩を謝て。
客房よ行装ゝ。巴の尼よ別を告て。ゝゝ北國へゞ起行る。

作者云足利より挾野へ赴くよ今の順路を推ゝ紀。新田木崎太田八木
梁田川崎凡七驛を歴て九里あまり多ゝゝ。挾野より上野の館林へ二里と
この間よ船橋ゝゝゝ。高崎の東多。勝澤四宿のほゝゝ西ゝ
丁ゝ。又足利より武蔵へ赴くハ上野と武蔵の封彊多。神名川ゝゝ四里半と
挾野よ出てハ。ゝゝよ遠。ゝゝゝゝ彼津ハ大和も同地名。古歌よゝえて。いゝ名
ゝる舊蹟多。むゝゝハ京よ上るゝも鎌倉へ赴くゝも件の船橋をゝゝゝとゝ
當時の順路多ゝゝ。余ハまゞ親しくゝゝの地を踏よゝゞゝゝハ遠近方位を詳よせゞゝ
ども。途よ新古の差別あり。又その地名ハ存ゝゝゝゝゝの蹟むゝよ異多あり。今をもて
古蹟を辨ゝ。道路の順逆を定るゝゝゝゝ彼桂の勝ゝて。髪を鼓ゝゝゝゝゝ。

初輯第二十

綱總袴の游偵
假装束の情郎

刀野太郎時夏ハ巴の尼を説破せしれて憤る堪ざるとも。又いふとも甚べからざれバ。
おほ疑ひハ釋ぜども。脆て其処より取てうへし。日ふれてやうやく帰宅しつ。竊まさ
遣して。吉見の為体を守せ。彼宿所へその曉ごとに目代八嶋室平市任四五十人の
騎兵をねて。歩ごと推よせ。留守ハ廣光ひとりなり。討ものの大勢と血戰し。雑兵
許多の疵を負。その身も刀折れ力究て。組布をもて折よ。ひらけ。彼朝夷が
忽然と援来て。師任を投折て。雑兵ハを搗仆して。食竹叢へ投棄て。廣光
共倶逐電して。今ハその往方をもとめ。かくて師任主従ハ。筋骨を打折れて。
足あれども起とあたぞ。あれども携るまうこと。舌あれども言ものいふ。
守屋が家臣萬なしねど半日あまり。藪ハ篭て半死半生なりなを知ものの
絶てかうなをうくて又加勢の雑兵二三十人いそ来り。主の往方を索うて。
とうくして藪の中ハ仆るを見て驚騒ぐ。そうまく疲員を護ハ乗して宿所ハ
帰入るを程ハ死ものの過まへそう中ハ師任ハ項骨をやぶへ腰骨を
うち挫れ臥房ハ扶入られつその苦痛いべうもあるぞ。節くハ布ハ巻せ
皮膚ハ巻て膏薬をぬぐ。ぬぐ。蹴鞠の如く腫あがり。葡萄の如く
疵つ紀て。蚊の息のごとあり。然ども命ハ恙なく。ふハ横ハ臥て。飯湯
をだに嚥ぬ時夏これを守あ。ぜ呆ること半晌ばかり。謀ことのうくまでハ。
なりも果ぬるあとなのこそいとすもおそ。膝を抱て嘆息。おほ肺肝を
摧けども計策をなさしバ脆て臥房ハ入るあ。通宵いも寝ぬ。稍曉
うとう熟睡つ疲を果ぬこと。覚る比ハ亭午ぞなりぬ。まづハ嶋室平ぞ
病著を問んとて。髪ひき拭く衣裳を更め。奴隷只知ることをなるてその宿所ハ
いと紀よなるバ病床ハ身入れて。あるとハ臥て對面ぞ。現縛の為体。ぞ。わも
いやまうう。當下室平ハ省病人ハ扶らるて。累る横ハ背を倚ケ。刀野

ぬ。なんぞ遅延やらん。朝夷よ拗らして低弱不具のあれとぞ思ひぬ。他支ハ
とまれかくまれ。ひとへまで君が詰もまざれバ憑し。氣なくもひ死なば説ありやと
怨ぜんバ時夏愧る面色をそへる某ハと回答うけく。看病人かをうんうへまべ。
室平ハそのころを見て奴婢ホを遠く退せ刀野ぬ汚穢とも。誘ふ者こへ
居よ。ゆへと招くまゐく膝を進めて後方をうつて声を細め。某ハその夜さう。
義邦を追蒐て遠く藩屏を超ーうバこの天変を絶てもゝぜきの小日暮れて
帰宅あれバ。ひとの見糸遅きよあゝぜ。その故ハ如此さと箇様ゝと并平ハ謀
始あり義邦逐電の為体労して功なく神名川ようへるまつ終まぜ。ひらも
なく演説。某その夜并平が選らぶうよ疑ひ起りて義邦が逐電をそゝく
推察をうしぐも。緯急なるバ目代ハ告て加勢をもゝよ及バぜ一騎馳よ
追蒐ゝ勝澤のほうゝ。并平を追留ゝが天ハまぜ明ぜ烏夜あるふ某馬を

乗ゝ上りて。二人かゝ捕ひさけし。残念さよと介ーて。今ゝうゝ拗ゝ室平
ゝて嘆息ー。追蒐て捕ひぜ。和君が如く恙なくいこれまゝ幸ひ。彼
朝夷が武藝勇力。古今獨歩とゝぶべき孤凜天よりハよ降らず。又地よりて
涌ても出ぜ。図らぜ當所へ来るもの欺文援んとて埋伏をゝいづれかあれど
人ゝて。鬼神ようなゝ悍く。四十餘人の雑兵さへ彼奴ゝうよ結果れうされ
彼朝夷ハ領主の武威よ憚ゝ某ハ又を見あてぜ。やをれ師任ゝを見て。
足利殿へ吉見冠者が罪ゝきをよくやせ。又時夏ゝト倶よ與ゝ一蜜書ゝよ
あり。汝ゝ先非をもくバ。ひとゝが為よ訴ぐ。時夏が隠慝を顕ぜ。もゝれ後
ゝへ来て汝が頸をとるべきを墳骨ゝよく覚よといはゝまぜハ耳よ入ゝ。
朽をくも氣絶ゝんとのもの。ぜを見ぜ。痛所よ扶入られく頭髪よ拠の
あゝと云ひ。人よとゝせてゝれをゝんるよ。彼ト結よ與られ。迺和君が蜜書ゝれ赤

朝夷が結び著こるの文んを見んかへといひつゝ枕の下より一通をとり出して示すに
文時夏ハ忽地に顔色変りて応ぜず室平頻に嗟嘆す。和君何ぞの遺恨あり
て。朝夷を殺さんと計ぶしよりハ孤ども。師任がこの苦痛。喧嘩の側杖撲れ
ものゝ如きをなす五頭平が義邦をもて支堂と指ても證据ハなゝ紀ぞよ。ぶ
あろう更に恐ひぬ再三ゝび五頭平を問もおとさでハ管に早くもこの悔さよ。
と唸くまゝく。呟けハ時夏呵ゝと笑ひ安こ紀とを宣ひそこの一通偽ぎ
某固より朝夷を怨ること絶てなく何でふ法師を刺客ゝして殺さんと謀るべき。
これハ和殿に疑せて某を陷さんとふるくも謀る朝夷が文間に疑ひをこるる
使価に乗せられて義邦さへに五頭平が誣言あんとやひあふ狡身の病著に心
さへ弱りぬハ日ごろに似げなく。こもちふくひと辨に任て問るのゝ心ハ更に安ゝぶ。
肚裏にハこの人とまづ結果をゝびろう。とハ思ふゝて室平ハ呟くてこもち点頭の

あるき諄言面目なく。なほ相譚ぬきとハあれども項の疵を表こる布があまりに
締りて息絶ハ後ぬとも掛さバ時夏竊に欲ひ。某が死程な
結びうえて進らせん許ぬと遽しく蒲団のうへに膝をきめて室平が後方へ
項に巻こる布を解き。かぞうもそもよく欲と問て結びうる程に室平眼を細して
こハ慮外へも汚さじぬ願くハ今些し締りぬもよくいとへバ時夏布の端を
左右の巻まゝくまへさ分らバ彩狡と力を充ぬ屈と締さバ室平ハ呟滅入目を
白くしてもの足を向搔紀仰反こる時夏ハさもしをと膝に支く頸骨に武尚なるを
猛さこるバ忽地息ハ絶てこる人ちやんと件の布をもちゆく緩めて項の疵を
舊の如く巻竜くやをゝ死殿をかゝ薄。あゝやくと叫びて頻に人を呼
こるさバ看病人ハ走り来つ何すゝやと問ぬ果ぶ時夏ハ室平が死殿に指
大息つ紀あこゝハ今まであちあげよこもち潭ひあひこる瞬間にこう詰て仰ざぬよ

時夏病床より師任を繪る
時ゑつ

仆れ死ぬること久し。医師許人を遣らんや。まづ湯を水にと呑ませて城中やふ勅をバこハいかゞと驚き怪さる。紀國宅の男女数を竭して臥房に集合て異口同音に嘆息れど。いそぐ届ん鍼灸補写の效かゝれバ枕方に寄り後方に寄り食潜然として涙ぐ。時夏も鼻をうちて某年来目代とハ莫逆の友なりその終焉に面淡せ一ハ甚てあやまるべし。各位愁傷さぞあらん所要あらバ心ゆまなく嘆ぜ給へと叮嚀に慰ぜ。ものゞ密書を袂に引入れ告別して宿所へ退去ぬさても室平師任ハ近習その妻子まるもて子ども多うもなうるを固より意にあハざるものをバ親類うとも疎き遠ざけ。奴婢ハ只苛く使ひて栄利を旨とせ一ものをバ。その夥兵さへうる時とそ力を竭せとかゝれバ誰う時夏を疑べ紀寛に重き撲傷をバやうて墓なくなりるまでハざるべかりけり。

却説刀野時夏ハ已が宿所に還りて又つくづくとやふやう室平ハ已が資にあるあるに心よりハ五頭平に曩ぶ呂れうるを與して彼逆物を畧らせ一諸ひ密謀の術あるに且くその餌を與ひ一さうるれども嫌らでやあ当國をうも去らぜ。いと果敢なくも土民ハ生拘れる癡漢をバ救ひ拯うもいく程もなく又生拘らるて呵嘖に堪ぎるとうへさへ首伏せることもやあんと思ひよるバ這奴を成て四境に守兵を置るれバそゞまゝハ脱れがたし。いとで苦肉の計を行へと欺きもめく憎一とそ美邦ハを陥る囚ハ一見許牽ものを紀一ハ後に救んなるで這奴を賺して自滅をうる一旦與せ一ことうを世ものを人やあらせ一とそ云云に計をうるの師任既に死るをバ領主ハ別人をそ又五頭平を鞫問せ一れんのそのうびに彼癡漢ハ箇様ゝと実を吐バられも脱るる路ハなし。畏覚る前ハを。

ともかくもせべろしと心をうつよびて決めて密くよ准後しつ小夜深く宿所をたち出師仕ぐ敷地なる獄舎のうへ潜びあるよ雨蕭こと降そぼてこの夜殊ふ暗くうるる。屋内知るとなるバ築垣を乗踰く裡面のゆうを窺ふこの日師任死らしバ僉忙然と呆れ果てその務を缺りの多くもさるバそのるふ管ざる獄卒さへ怠るるん人おとろも讓めあるるバ時夏竊よ欺びく。獄舎の戸口よ刃を潜まり早蠅ることゆうるれば裡面より五頭平誰と問時夏爪ゆを籠子を敲きさい訝りを時夏之和殿を救ひ出さんるよ。竊来つるをあるざるやといふよ五頭平搔拶ぐ戸口よ居より透して憑しや刀野ぬ。孔繋れるるの日ふ心まちのこせるれても獄死所ゐるよあるざれいるふ。とびつるよ前諾を違ぶてるゆも竊来ゆこと今さる感謝よ堪ざるのこさてゆるて脱出んと籠子ふるをうけ密語バ時夏ゆてされバ

救ひ出バ難くもあ〜孤ど今些時早ゆを獄くあを脱去るゆ夜ゆまぐ遠く走ってふるくゆ蹤を埋めバ縛完しとハいべるゆを餞てハ特よ鮮美ゆん且兵粮しを肝要ゆ色窄しく時を移さんより腹を造りて出立と真実ゆるく懐ゆ焼餅をとゆ出つ。籠子の間よさ入れて遞与せバ五頭平まゆ欲び送るゆ死和君ゆ懇切ゆでゆ賞翫せざるべき時よゆてハ百味の珍膳齢を延る仙丹を痩ゆ肚よ実を入やてまゆる出んと件の餅を引ちぎゆ噛りて旨しくと息をも吻ぜ食ひ竭して胃を拊今ハゆや縛足ぬ頼くハ一碗の湯を飲ゆと戯ゆく舌もゆるゆ五頭平ハ苦と叫て仰ざゆよ倒れんとして膝組締。ゆ訝しや彼餅。肚よ充ルバ忽地よ五臓を役る大苦痛り毒茱よゆぶゆ。といべバ時夏冷笑ひ遁五頭平明察なゆゆ。れ美邦ホをとゆ逃つ師任よハ疑ゆ汁ゆしゆハみゆ齟齬よ趣舎

まろきさまかれしバ汝が口より機密を洩され吾儕に祟あらんと後先を思ひて
安からざりしにより目代師任を竊に絞殺しつ。かくて汝を毒殺せバ機密を洩すまじ
とおもひしに竟に脱れぬ命なりと諦て早く死ね悶擾バ苦痛をまさるものを。
不便のものやと誇貌に説示されし五頭平ハ驚怒て篭子に携て起んと
するハ轉輾び悶しむ必死の呼吸をものれ時夏冥土の伴侶喫着ても此怨
後さぞやハと敦圉声も漸々に細る篭の鳥猛きこゝろも弱りて檻に獣の斃を
如く膝折伏て息絶ぬ。時夏ハ外面に佇立在て窺ひ既に氣息たえしバ
莞尓と笑て足ばやに書斎へ退きつ。又塀を踰て邑を潜て竊に
病所にかへりぬ。かくてその次の日に室平が親族郎兵ホ領主の舘へ参りて
師任が病死及五頭平が頓死のよしを訴しかバ義兼いぶかしみて眉を顰め逆徒義邦ホ
遂電していまだ往方をしらざるに師任ハ深痍に没し又五頭平ハ禁獄の疲労に
落命せしといへバ穿鑿の度を失ふに似たり。されバ刀野時夏をもて彼顛末を知り
つらめ嚮に吠つるとわれしバ太郎を召て問べき也。師任が徒ハ且退出よとて退され
ける程に刀野太郎時夏ハ俄頃に領主に招れて、いそ精やかに衣裳を整へ
まゐりやがて告文所に来りしに義兼聴て對面して五頭平を生拘りその為体
義邦逐電の縡その起由を問ふに毎に時夏臆する氣色なく言を巧にして
詭り飾り井平義秀廣光ホも皆修羅五郎經任に一味同意のものどもなり。逹
義邦を追とめんとて勝澤の松原にて苦戦せしその夜の形勢。又五頭平を
生拘るその日に縡の為体を知するを聞おわり良に辯佞利口に仕しつゝ彼を
貶して我を褒め國の為に力を竭し亡父の汚名を雪んとて死すとも辞せじ
彼徒を搦捕んとせし如く言委をつくし答ければ。義兼愚將にあらざれども
刀野ハ親く吉見ハ疎く且員とハなしまその言に理あるがごとく聞ゆれバ説

迷されて感嘆し親には逆立なさる通愛て純壮佼らか此度和殿が誠忠ハ
鎌倉殿頼家へ上達せん命ずる所の如くならバ彼義邦が徒ハ是逗逆の餘類之
渠が支黨なほあるべしものびくに穿鑿していよく忠勤を励ミたへまからバ
本領安堵のみか遠からぬ制度なるべん年来扶持せしされさへ面を立べ
この時も努よくせよと褒奨しく時夏を退せこの日鎌倉の営中へ騎馬の
使者をまゐらせて件の倅の趣をおちもなく注進せ第三日の暁に因幡介
廣元の奉翰に執権時政の下行書を相添て義邦義秀ほを追捕のす。
骨相書をもて速に國々へ徇らしむべし又時夏が忠勤の為体と称妙み
愚召猶孔明を遂させて勧賞の沙汰あるべしと義兼に下知せらる時夏
これを待へ喜びて笑てぞゐたりける案下某生再説并平ハ義邦の蹤を
慕ひて加賀の小松を心あてにいそぐとすれど途遥なる客宿をかさねゆく。

日ごろ歴てゆくに佐味竺内が宿所を訪ふまいぬる年まで柳営頼家に親
しく仕まつりて在鎌倉とぞ聞えたるその家にあらねバ誰も問ひて義邦の
安危を其処にまうよしあるべきよひるハそれだの気そゆかふともせん方なし此
ころよりして街衢に義邦義秀いへバさらでもが骨相書さへ掛られて穿鑿
厳重なりけれバ驚犯もそれて其処を立退犯他し郷に立よれバあやしも又
こが骨相書ありかくなれバ彼人々ハいよ因徒となりぬひしろ又山林に身を躱して
辛静るをまたなにゆ欽慰に蹤を慕ひ徒に徘徊せバ是れ亦烟裏の魚と
なんそん駿河前司廣綱朝臣ハ年来退隠しぬれども鎌倉殿せうかれど
原一族の上﨟へ彼刀祢などへ身を寓おバ窮屈の縲紲を脱れぬせんと墨
ハやひけなくに菖蒲の尼公の愛顧を蒙り廣綱朝臣にも見参して恩賜
さへまねかりし再会の契あるべバ明に地に危窮を告て憑こまうさむと

尋思一つ姿を変笠をちく尚消残る北國の雪を踏て山路を辿り辛くして越路を過りて信濃上毛國あまく起て来れば露よ宿る野中の月を友とし瞻仰そよぐ風よ流りそハ世よもきゝ水境ヒが影さへも曇るなり。

さゝぬぐゑ旅ハ悲しきものなるよ草や木も心なしなく虎の尾を踐む恐懼患難比るよ抱きなるべし去ろ、あしれども恙なくその夏四月十日あまりよ武蔵國大田の荘なる藍玉院よ来著き比丘尼寮よ起居く竊よ巴の尼を問ひて云云といひ入るよ寮ゆも認るものあるて遽しく出迎へこハ くゝと言ひぬ。

巴の尼ハ三月の盡よ豫ての志願なればとて院主よ別を告げ又國くを廻んとそ何処とハなく出て行ぬ彼尼今ハ如何とふるも院こハもうく地ん身がなりをいつくと想像るまで俟ひくぞをハもやるとくあるこゝ草鞋脱て客房よ誘引つゝと叮嚀よ音待く尼公よくと告あるせバ且く疲労を

休ひ。ねて夢れとそ命ら。井平ハ巴の尼よ況あざるゆるゆるども。歎待ぞ弥まとゝ憑しなる心ぢ弱ぢ敢亦疲労を厭ぞ。繊る裳ゝ紀年一件の比丘尼が後よ跟く菖蒲の尼公よ見まも當下尼公ハ井平が前諾を違へぜ一く。

夢ぢるを褒させく恙かゝと問ぬバ井平ハ恭しく。寒暖を述毋異を祝。

さそ義邦の往方ゆゑで追捕をきく嚴重ぞ骨相書をめて索らるゝ。

こゞうゝ又人のゝ客宿の患難日夜の恐怖彼とゆく此となく。潜やうよ告げ犯せる罪ハ為れども有繋よ命ハ惜ものゆゑ慚を忍び姿を窶しゝ家よ入ゆゝ喪家の狗ゝ人よ媚び窮鳥懐よ入るよ似くん欲命運竟よ脱しく。

搦捕るものゝ為ハ亦是尼公の慈善よよるゝ未期の十念兼をりく来世を安くせんるよ再び参りそひとゝひ沈て演しバ尼公ハ笑て嘆息。そゝうゝハ犯るとゝ。去ゝあるとそも當院よ一ゝひ足を入るゝものハ罪の重犯ゝるさを

問ぞ。みの刑罰を脱れう。法衣の袖は掩ひてもいそで大赦の時はあハせんふうく潜てねすゝと来憑ーく咲えあ。冥加は油をぬゝもまで井平ハ感謝は堪じ。つぐ告るゝーあゝ告るゝーあゝバ亦義邦をもこの処は置まほしくぞ思ひる。且くーく菖蒲の老尼ハ左右の人を遠ざけて井平を傍へ近く招ぎて声を潜め。和殿がうへハ尼が諾ひつ尼が憑を信ることうけ引るゝ欲いまぞやと向れて井平一銭は及ぶぞ其既は再生の大恩を蒙まて犬馬の労を盡さぞハいづれの日か徳は報ひん仰せさせのへと勇氣を含て忘ーゝバ尼公ハ歓び大ゝこなゝゞ。然らバ匿さぞ告げんとゞ孫廣綱は一個の女児あゝ且見姫とを名つけゝる。玄孫ようとて誇るゝあゝねど容止醜ゝゞ心操亦風流ゝう敷島の道は三十人のそハ曾祖頼政卿の口調を学び管絃の技を嗜ゝて八大叔母代柴加賀ぐあゝぐゝ似ゝう。青春あゝは十八歳いまぞさかゝる婿ゝ信ゝぞ深窓は養れゝく。

異なることもあるぞーは曩は和殿が加北へとて。辞ー去ゝうその比あゝぞ只何となく病ゝづくひて茶療医術も效なーこの月は迫るそハ狂ーきるゝ咲えて。夜とて安くハ睡り侍ゝぞその癖の為体物の怪などゝ思めるべーゝるゝ。廣綱ハ風淫の病着あゝ。五十保の温泉は湯治せんとそいぬる月の下浣上野へ赴ゝるその留守は姫が難病。されバとてゝるくと廣綱は告るとも。武士ゝるゝが他咲ゝうくいそぐう勝て還るぞ。そハおゝくは尼を恨ん家は三人の花堂あしぐも下河邊小三郎高吉（頼政の郎等。下河辺義三郎。その後第三編に載る）上野へ赴ゝつ。間中隼人守直猪隼太守資（子とふ倍同上）ハ本貫遠江は赴ゝくまぐゝぞ。高僧験者のゝを借んハこれも亦他ゝうくて廣綱がゝうは稱ハ只明暮は拘ゝゝ尼が珠數は襟へども。癒るべうもあゝぞー。和殿ハをさく武藝は長ゝうんどゝあるゝめと廣綱ハ攢ゝうぞいそ墓目の弦は襟ゝく。

物の怪退治をあらばこそ不幸なり。憑むといふこのすべをけうぬと他度も
かく説示されく井平ハ困果る頭を擡とうけかうりいひぬ。ぬんねどゑあんん
おハ火を踏こ又を握るも推辭まべ紀なあ〜祇ど武藝未熟の某ども晴る
墓目をよくせんや特よち家ハ近衛のちん時内裏ゑく怪鳥を射ゆよ頼政卿の
学孫こ刀祢ハさこせみハばも氏もお紀下郎とて弓箭のよよ與らバ孔子の
家よ道を講ど。釋迦の墨よ法を説く綾よ伝く嗚呼とやいん已をちぬと
いかも過こうこの淺ハ汗させねへうと。辭を竭して固辭せれど尼公ハつやく
汗ーもぜいるくそしれハ人をたべで刃を脱るの辭こ名なる兵ゑ〜バを。射損じこる
と紀恥ともいあ。すや和殿ゑ赤をちんじこうも。誰ち拙ーとそ笑ふべき固よ墓目ハ
修法よありそ正鵠を弟ふのあ〜ぬよそのすをこよ学びゆこうばこくもあ〜ぬ
所行あるべー。老るあよねをいいくこうこ紀人のころやとこ〜こ良ある諺ふ

井平まもく慚愧して額の汗をあー拭ひかくあでよ思吾ハ脱るよ路もけを感
おさでるこれおこ〜量くさくいへどもつふあつべう ゆをとやうゑくよ諾ひ〜ゑ尼公ハ
又よ欲びて。ホらバ今宵更蘭て姫の臥房へ紫内をさ丸人且退紀て疲労を休へ
心ゑ〜ふ准備をせおこいと真成よ相潭ゆひつ堂高く打鳴ー專女を呼びて
井平を如此くと少えゆべ。ろゆ果て客房誘ーえつ饗膳をうて浴させ
髪を結させおどもる程よ夜ハ子二つの地おをあ〜ぬかくて新ー紀衣一襲よ
縹縄の素袍烏帽子を賜てろ〜井平これを壮装束紀く再び尼公よ丸来沢
いと寝れうと紀ぐふも一際目ろつ美男あるよ又華ゆるよ装ひ立てハ〜ゆふ
中ーて愛敬つ紀ろ尼公いうちゆ〜笑を適愛ら紀壮士ゑ弓箭ハいるま。
と問かへバ。さゆ墓目ハ滴箭をてそ用ひへ。あよ紀ろの願あ〜雷上動の
ちん弓よ兵羽遠羽のちん征箭ハ頼政卿ゑ〜偽ましく當家よ発ゆよあん

みちのくの
安達の沼
乃花ゝつゝ
かつらゝ
ゑ
ゆ恋や
ゝくゝるむ
かつら姫
おさく枝
井平
清岡

もし彼弓箭を貸みつく某弓術未熟といふとも名ある武器の威徳によつて物の怪退散せしめん欤慮外の所望よ身を顧ぜいと憚あるとかれ申ける

まで申くびとおそるくとーが尼公ハ笑ひて点頭件の弓箭ハ廣綱が殊よ秘蔵の物なれども何ぞも姫ぐ弱べとう宝させて竊よ貸べ。夜なを深つとくくと頻よいそがし立ぬ且見姫の方ざ面も豫くあろを沼うえ梭枝といふ女房よ若意奴隷を相副て井平よ案内せよとそ迎ぞそよ遣しう尼公ハ梭枝を呂近つけて

かほ又緯のあろをぼさせ。あやまるよ専女を副て廣綱の宿所ぞ遣しつ。藍玉院とハその間いと近ぞれバ程もなく衡門を進ぞ入るを有繋國司の餘波とそ茅葺ぞれば家造り田舎なぐらよ都備うう井平ハ誘引まつく。左邊の築垣を遶り入るよこの処庭門あり裡面ハ名樹繁あるべし夜目ぞれバ定ぞなるぞ桟枝ハ先とう先よ走て渚折戸をほとくと敲く程よ女の童ハ

紙燭乗しうう老女出て井平ハを迎入て廊よ屋ぞのぼしてそれ彼ハ扶桑ぞ

その管待よろづ密やうあそ男子ぞうあるを見ぞ且くして件の老女ハ編よ

弓箭をとりて来つく素を解て胡籙をおー立て井平がほうてさーよせ

雷上動の弓兵羽透羽の箭よ付り物の怪ハ丑と寅の時の間ぞ来いと徒然よ申

らぬ所用あらバ女の童を呼せ申と慰めて食奥まうる所よ入ぬ井平ハ彼

弓箭をとりあげておー戴れつ。弓よ尋常のよりあるぞれりうる

瀬よ立ぞハこの弓箭を取るすーあんぞ一期の面目とのうかーとぞへバ心よ

勇あり。よりも悪霊妖怪ありとも編さぐあと弓杖衝そ且見姫の寝所と

おぼーき一室のこるよ掛う翠簾をそんを巻よみ更て通宵ぞう護りてそう。

この段特よ長ぞ。なれバ編を嗣巻を更て第三編の初よ解ぞ出像ぞよ餘真を色う。

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之五終

編述 曲亭馬琴稿本

浄書 荏土 千形仲道
棚加正臧

出像 一柳齋豊廣畫

彫人 京攝 六剞劂合刊

春王正月
文化四年五歳
吉日發兌

江戸馬喰町三町目 若林清兵衛
筋違御門外平永町 山崎平八
大坂心齋橋唐物町 河内屋太助

○江戸著作堂主人隨筆並國字小説畧目 浪華書肆文金堂藏版

あゞ佛の記 隨筆大本 六冊近刻
この書は名つゞうゝ婆女ゞ筆をきみゆもあゞ佛さふこと いへを仏はおゞゝ仏かれどもこゞ持仏の祖よそくおぼめろハ 人欲の私ぞゝなんこの徒ゝも又ゝゝなりとみゞゝ滅めらゝゝ

里見八犬傳第二輯 柳川重信画 全五冊 去ル子十一月より賣出しおたれ八犬士のうち犬塚志乃犬川荘助ゞ列傳ゝゝそーむこの編はあり

朝夷巡嶋記第三編 歌川豊廣画 全五冊 来寅正月一日より賣出三年ハ奥州厨川の經任退治ゝ起りて義秀鎌倉ゝかへるゝ終る

燕石雜志 隨筆ゝ佳説奇談多ゝ 全六冊

俳諧歳時記 四季の詞細注便覧の一書ゝ 全二冊

月氷奇縁 以下ゝ入よゝ本 全五冊

新累解脱物語 北齋画 全五冊

昔語質屋庫 春亭画 全五冊

松深情史秋七草 豊廣画 全五冊

曲亭家傳神女湯同精製奇應丸同婦人つぎ虫妙藥并ニ曲亭画賛扇ハ取次仕ハ

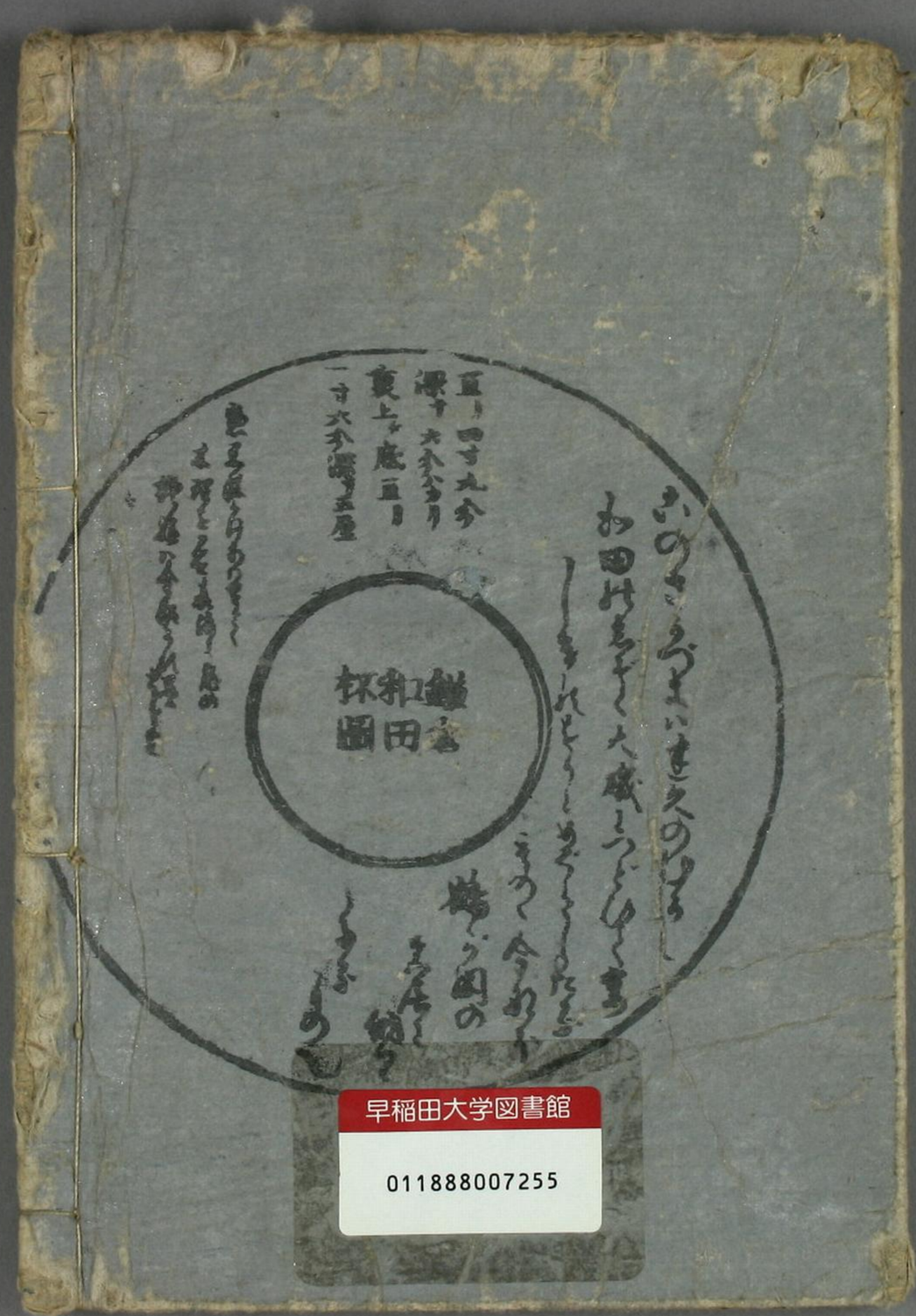
拙舗累年書籍ヲ鬻キ近來都鄙一般書房ト弘通ス且ツ諸
府縣廳或ハ諸先生ノ御藏版アル毎ニ幾兌ヲ命セラル故ニ新板
圖書ハ積テ以テ洩スコトナシ加フルニ和漢洋ノ書冊ハ今古ヲ不論
亦以テ備ヘ置ケリ仰冀ハ書ヲ購フノ君子其多寡ニ嫌ナク弊店ニ
就テ御買得アランコヲ

文榮閣主人謹白

製本處

前川源七郎

大坂府下心齋橋筋
北久寶寺町卅九番地



早稲田大学図書館
011888007255